コラージュ作品とストレス・コーピング および対人ストレスの関連について

臼杵亜衣・市来百合子・石田　弓

On the Relationship among Collage Work, Stress Coping, and Interpersonal Stress

Ai Usuki , Yuriko Ichiki , and Yumi Ishida

Collage therapy is a form of art therapy introduced in Japan around 1980. Based on preceding research and space symbolism, this study examined the relationship among collage work (pasting up point/pasting up contents), stress coping, and interpersonal stress. No significant correlation was found between the pasting up point and either stress coping or interpersonal stress. However, pasting up contents were found to be partially correlated with stress coping and interpersonal stress. In particular, the pasting up ratio of “vehicles” was found to have a positive correlation with confrontive coping, positive reappraisal, and interpersonal stress. It was suggested that dynamic psychological energy is more readily reflected in “vehicles,” as in the interpretation of sandplay therapy. Furthermore, a negative correlation was found between confrontive coping and the pasting up ratio of “natural landscapes.” This suggested that the psychological energy of confrontive coping, which expresses proactivity against difficulties, is not reflected in “natural landscapes.”

キーワード： collage work，stress coping，interpersonal stress，space symbolism

問題と目的

コラージュとは

コラージュ（collage）とは，美術表現の一つであり，雑誌や新聞から，イラストや写真，文字などを切り抜き，画用紙等に貼り付けて作品とするものを指す。貼り付けたいものを選択し，それを画用紙に配置するという過程から, 二次元の箱庭とも言えるものであり, 日本の心理臨床の場では, 1980 年代から導入された。以後，コラージュは芸術療法の一技法として，学会やセミナーなどを通して，児童相談所，教育相談所，学生相談室，精神科，神経科，心療内科，小児科などに普及している。

コラージュ作品と性格特性の関連

コラージュ療法は，自己理解や自己表現を高めるという治療的な側面がある一方で，近年ではアセスメントとしての適用を目指した解釈仮説も検討されている。2000 年以降のコラージュの研究動向を追った青木（2011）は，解釈仮説の構築およびアセスメントとしての検討を目的とする研究は，既存の質問紙を使用し，性格特性とコラージュ表現や傾向を検討するものが多いと述べている。

佐野（2002）は，コラージュ作品において，右部貼付の多い被験者は，YG 性格検査における抑うつ尺度特点が高いという結果を得た。従来，空間象徴仮説では，右領域は外向性を表すため，社会に目が向いており比較的適応的であるという解釈がなされてきたが，この結果はそれと一致しないものであった。これについて佐野（2002）は，被験者が健常群であることから，YG 性格検査における抑うつを「適度な問題意識」として捉え，ストレス・コーピングとコラージュ作品との関連を検討した佐野（2001）をふまえ考察を行った。佐野（2001）では，右側に切り抜きを多く貼り付ける被験者は，コーピング・スタイルを測るラザルス式ストレス・コーピング・インベントリー（Stress Coping Inventry: SCI）において，困難な状況に対して積極的に努力する傾向を示す対決型が高い得点を示した。このことから，コラージュ作品における右領域への貼り付けの多さは「ストレス状況を変えようとする努力の現われ」と理解された。これをふまえて，佐野（2002）はコラージュ作品における右領域と抑うつの関連について，「問題に着目し，変化させようとする意志」としての適度な抑うつの表れであるという見解を示した。

本研究の目的

非言語的表現であるコラージュを通して，制作者の性格特性や心理状態を把握することは，制作者を理解する上で意義のあることと考えられる。しかし，コラージュ療法ではまだアセスメントに関する研究が少ないため，制作者理解に関する客観的な指標となるものが少ない。そこで本研究では，コラージュ作品を通して制作者を理解するための指標を見出すことを目的として，コラージュ作品と性格特性との関連を検討する。

YG 性格検査とコラージュ表現や傾向との関連については見解の一致が見られていないという青木（2011）の指摘から，本研究では YG 性格検査のような性格全体の特性を測る尺度ではなく，佐野（2001）において関連が見られたことをふまえ，コラージュ作品とストレス・コーピングとの関連を検討する。佐野（2002）と同様，右貼付の多さを「ストレス状況を変えようとする努力の現われ」として捉え，「対決型」と右貼付の関連が予想される。

また，佐野（2002）で示された抑うつ尺度特点と右領域への貼り付けの関連に着目し，抑うつ感の背景にあると考えられる様々なストレスに検討の視点を定めた。ストレスとは「身体的健康や心理的幸福感をおびやかすと知覚されたできごと」であり，「物理的ストレス」，「環境的ストレス」，「社会的ストレス」，「肉体ストレス」，「精神的ストレス」，「人間関係ストレス」の 6 種類に分類されている（丸山・白川，2006）。空間象徴仮説における右領域が外向性を表すことをふまえ，本研究では特に人間関係ストレス（対人ストレス）に着目する。外向性があるからこそ，対人接触の機会は多くなり，そこで感じる無意識的なストレスが右領域への貼り付けと関連すると仮定した。そして「対人ストレスイベント尺度」（橋本, 1997）を用いて，コラージュの貼付箇所と対人ストレスの

関連について検討を行う。

また，コラージュ作品の分析では，貼り付けた箇所だけでなく，どのような素材を用いたかという貼付内容も重要な分析の視点となる。たとえば，人間関係に関するストレスである対人ストレスは，人間素材と何らかの関連が見られることが予想される。そこで本研究では，コラージュの貼付内容の量的側面にも注目し，統一素材を用いて，ストレス・コーピングおよび対人ストレスとコラージュの貼付内容（人間，人間（部分），動物，植物，建物，乗り物，物（家具やアクセサリー），自然風景）の比率との関連について検討する。

方法

被験者

「芸術療法」の講義を受講している大学生 38 名（男性 13 名，女性 25 名）に，コラージュ療法の理解の一環として授業の一部を使ってコラージュを作成させた。このうちデータに欠損があったものを除いた 37 名（男性 13 名，女性 24 名）のデータを使用した。対象者の平均年齢は 21.17 歳（*SD*=2.60）であった。

調査材料

コラージュ作品：八つ切り白色画用紙，はさみ，のり，統一素材シートを用いて作成した。統一素材シートは，条件統制のために本研究で作成したものであり，8 種類の素材をそれぞれ 12 枚用意し，内容ごとにまとめたものである。これらを，B4 判片面カラー印刷 8 枚の左端をホチキス止めした冊子にして調査対象者に手渡した。シートの内容は，佐藤（2002）で用いられた「素材図版シート」を参考に，人間（女性，男性，子ども），人間部分（目，鼻，口，手，足など），動物（肉食動物，草食動物，鳥類，魚），植物（樹木，花，観葉植物），建物（家，寺，城など），乗り物（自動車，バス，電車，飛行機，船），物（アクセサリー，ぬいぐるみ，文具など），自然風景の 8 種類を用意した。

ストレス・コーピング・インベントリー（SCI）（日本健康心理学研究所，2011）：ストレス対処様式の傾向を把握する尺度である。ある特定のストレス状況（友人とケンカして，殴られたなど）を具体的に思い出して，その時どのように対処したかを考えるものである。本研究では，佐野（2001）でコラージュとの関連がみられた「対決型」，「責任受容型」，「逃避型」，「肯定評価型」の項目（32 項目）を用い，「あてはまる」，「少しあてはまる」，「あてはまらない」の 3 件法で評定させた。

対人ストレスイベント尺度（橋本，1997）：対人場面におけるストレス発生場面を 30 項目設定しており，そのような出来事が起こった時に「どの程度ストレスを感じるか（程度）」，「最近 3 カ月の間どの程度の頻度で起こったか（頻度）」を 1（全く感じない・なかった）から 4（非常に感じる・しばしばあった）で評定させ，各出来事における頻度と程度を掛け合わせたものを対人ストレスインパクト得点とする。社会の規範からは逸脱した顕在的な対人衝突事態である「対人葛藤」，社会的スキルの欠如により，劣等感を触発する事態である「対人劣等」，対人関係を円滑に進めようとすることにより気疲れを引き起こす事態である「対人摩耗」の 3 因子から構成されている。

調査時期

2013 年 5 月下旬に実施した。

4.調査手続き

集団法によって実施した。調査の準備として，各座席に封筒とのり，はさみを用意した。封筒の中には白色画用紙，素材統一シート，コラージュに関する質問紙を入れておいた。封筒の下には A3 判の両面印刷の質問紙を用意した。表面には「対人ストレスイベント尺度」，裏面には「SCI」が記載されていた。対象者には，表面に年齢と性別の記入を求め，筆者が教示文を読み上げた後に質問紙への回答を求めた。所要時間は 10 分であった。次に，封筒から素材統一シート，画用紙を出すよう指示し，「素材統一シートの素材を自由に切って，画用紙にあなたの心にぴったりくるものを貼り付け，絵を作ってください。内容は自由です。素材はいくつ貼りつけていただいてもかまいません。ただし，配布した冊子は一人一冊なので，他の人から素材をもらうことはできません」と教示した後，コラージュ作成を開始した。所要時間は 40 分であった。コラージュ作成を終了するように指示した後，「コラージュに関する質問紙」を封筒から出すように指示し，回答を求めた。その際，余白部分にコラージュ作成について感想を記述することも求めた。所要時間は 8 分程度であった。

結果

結果の整理方法

コラージュ作品：貼付け箇所については，作成されたコラージュを縦に 3 等分し，左・右・中央の各領域の切片数をカウントした。全切片数から中央に配置されたものの切片数を引き，左右それぞれの切片数で割ったものを，左貼付比率，右貼付比率として算出した。カウントの際，少しでも線にかかっている切片は，全て「中央」に分類した。貼付内容は，素材統一シート作成時にあらかじめ設定した，人間，人間部分，動物，植物，建物，乗り物，自然風景，物の各項目についてそれぞれカウントし，全切片数で割り，各内容の比率を算出した。

SCI：下位尺度である対決型，責任受容型，逃避型，肯定評価型をそれぞれ合計し，各下位尺度の得点を算出した。

対人ストレスイベント尺度：対人ストレスインパクト得点を算出した。程度，頻度についてもそれぞれ合計し，程度得点，頻度得点とした。対人ストレスインパクト得点を「対人葛藤」，「対人劣等」，「対人磨耗」の下位因子に分けて得点化した。

2.分析結果

有効回答者 37 名の貼付箇所（左右），貼付内容（人間，人間部分，動物，植物，建物，乗り物，風景，物）それぞれの比率について，スミルノフの検定を行い，外れ値となる被験者を抽出した。そして，貼付箇所，貼付内容どちらか一方でも外れ値として抽出された被験者を除いた 31 名（男性 11 名，女性 20 名）を対象に分析を行った。平均年齢は，21.23 歳であった。各尺度から算出された数値，コラージュ作品の各項目の数値の平均と *SD* を Table 1~3 に示した。

Table 1
SCI各下位尺度得点の平均と*SD*

	平均	*SD*
対決型	6.42	2.64
責任受容型	8.68	3.47
逃避型	6.35	2.85
肯定評価型	8.26	4.19

Table 2
対人ストレス尺度の平均と*SD*

	平均	*SD*
対人ストレス		
程度	79.29	13.80
頻度	63.10	14.34
対人ストレスインパクト	171.97	61.93
対人葛藤	42.48	17.43
対人劣等	64.81	29.44
対人磨耗	28.81	9.79

Table 3
コラージュの各項目の平均と*SD*

	平均	*SD*
総切片数	23.06	10.85
貼付箇所		
右	.48	.12
左	.52	.12
貼付内容		
人間	.04	.06
人間部分	.15	.18
動物	.16	.11
植物	.21	.13
建物	.10	.10
乗り物	.07	.07
物	.11	.09
自然風景	.16	.14

*貼付箇所、貼付内容の数値は比率

コラージュの貼付箇所とストレス・コーピング，対人ストレスとの関連

SCI の各下位尺度得点を独立変数，左右の貼付比率を従属変数として相関分析を行ったが，いずれの下位尺度も，貼付箇所と有意な相関は見られなかった（Table 4）。

対人ストレスとの関連については，程度，頻度，インパクトいずれも貼付箇所と有意な相関は見られなかった。また，対人ストレスイベント尺度を構成する対人葛藤（α＝.81），対人劣等（α＝.91），対人磨耗（α＝.77）の各因子得点と相関分析を行ったが，いずれも有意な相関は見られなかった（Table 5）。

以上の結果から，ストレス・コーピング及び対人ストレスは，貼付箇所と関連がみられないことが示された。

コラージュ貼付内容とストレス・コーピング，対人ストレスとの関連

SCI の各下位尺度得点を独立変数，各貼付内容の比率を従属変数として相関分析を行った（Table 6）。対決型では，乗り物（r=.53, p<.01）と自然風景（r=-.40, p<.05）との間に有意な相関が見られた。また，肯定評価型では，乗り物（r=.42, p<.05）との間に有意な相関が見られた。全被験者の平均値と比較して対決型得点が高く，乗り物素材の貼付比率が高い作品を Figure 1 に，全被験者の平均値と比較して対決型得点が低く，自然風景素材の貼付比率が高い作品を Figure 2 に示した。

対人ストレスの程度得点，頻度得点，インパクト得点を独立変数，各貼付内容の比率を従属変数として相関分析を行ったところ，対人ストレスの頻度と乗り物，程度と人間部分に 10%水準で相関が認められた（Table7）。対人葛藤得点，対人劣等得点，対人磨耗得点を独立変数，各貼付内容の比率を従属変数とする相関分析では，対人劣等と動物に 10%水準で相関が認められた（Table 8）。

Table 4
SCIと貼付箇所のPearsonの相関係数

	対決型	責任受容型	逃避型	肯定評価型
右貼付	−.19	−.21	−.30	−.09
左貼付	.19	.21	.30	.09

Table 5
対人ストレスと貼付箇所のPearsonの相関係数

	程度	頻度	インパクト	対人葛藤	対人劣等	対人磨耗
右貼付	.11	−.18	−.09	−.16	−.07	−.13
左貼付	−.11	.18	.09	.16	.07	.13

Table 6
SCIと貼付内容のPearsonの相関係数

	対決型	責任受容型	逃避型	肯定評価型
人間部分	.15	.03	.11	−.04
動物	.21	.19	−.17	.25
乗り物	.53 **	.07	.16	.42 *
風景	−.40 *	−.04	−.08	−.29

† p<.10, * p<.05, ** p<.01

Table 7
対人ストレスの程度・頻度・インパクトと
貼付内容のPearsonの相関係数

	程度	頻度	インパクト
人間部分	−.31 †	−.22	−.28
動物	.21	.25	.27
乗り物	.05	.30 †	.20
風景	.03	−.14	−.07

† p<.10

Table 8
対人ストレスの下位因子と
貼付内容のPearsonの相関係数

	対人葛藤	対人劣等	対人磨耗
人間部分	−.18	−.28	−.19
動物	.26	.31 †	.04
乗り物	.22	.16	.05
風景	−.09	−.10	.05

† p<.10

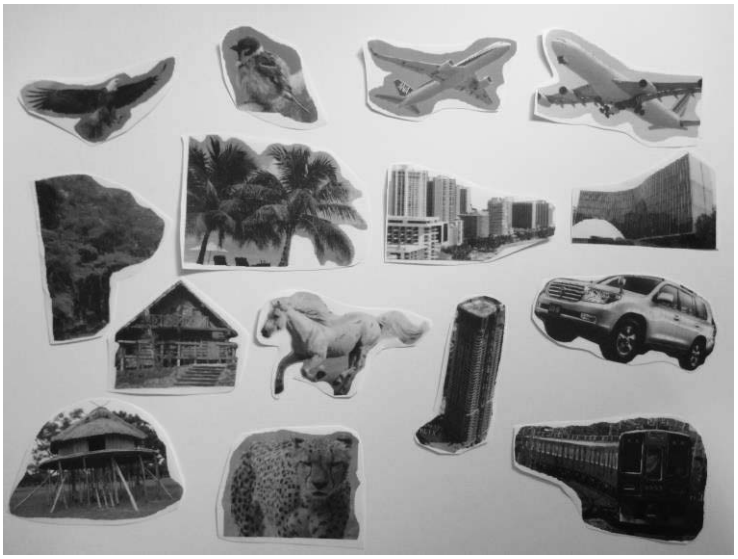

Figure 1.　対決型得点が高い被験者の作品（筆者らによる再現）

Figure 2.　対決型得点が低い被験者の作品（筆者らによる再現）

考察

コラージュの貼付箇所とストレス・コーピング，対人ストレスの関連

ストレス・コーピングについて，佐野（2001）では右側への貼り付けと対決型の間に関連が見られたが，本研究ではそれを支持する結果は得られなかった。佐野（2001）は左右の 2 分割で切片数

をカウントしていたが，本研究では 3 分割し，線にわずかでもかかっているものを中央としてカウントするなど，左右の貼付箇所をより厳密に判定した。その上で異なる結果が得られたことから，佐野（2001）の知見は確定的なものとは言えず，対決型と右側貼り付けの関連については，今後も検討を重ねる必要がある。

また，本研究では，佐野（2002）の右領域と抑うつに関する知見について，その背景にあるストレスが関連している可能性を考え，空間象徴仮説において外向性を表す右領域と対人ストレスとの関連を検討したが，結果はこの予想を支持しなかった。空間象徴仮説は，心が生み出してきた世界観や体験について空間の象徴的意味を見出すものである（松下，2007）。つまり空間象徴仮説は，被験者の内的世界や体験と関連するものであると考えられる。抑うつの背景にあるストレスが同じ対人ストレスであっても，それによって生じる内的体験は様々であることから，対人ストレスは右領域への貼付の多さに反映されにくいことが推測される。

コラージュ貼付内容とストレス・コーピング，対人ストレスの関連

コラージュ作品の貼付内容とストレス・コーピングの関連について，乗り物は対決型と肯定評価型との間に正の相関が示された。対決型は「困難な状況を変えようとして積極的に努力する，危険，失敗を承知で問題や相手にぶつかる」傾向を示す。また，肯定評価型は「困難を解決した経験を高く評価する。困難な状況を自己発見，自己改革とみなす」傾向を示す。一方，秋山（1982）は，乗り物の象徴的意味を「本能的な動物の力にひかれた人間の身体」としており，箱庭療法における乗り物は「エネルギーを表す動的な素材」として捉えている。こうしたことから，コラージュにおける乗り物も困難への前向きな捉え方，積極性と関連があると考えられる。すなわち困難を前向きに捉え，積極的に関わるにために必要な心的エネルギーが，動的な素材である乗り物に投影されやすいことが推測される。

一方，自然風景は，対決型と負の相関を示していた。田中・佐野（2002）は，POMS の活力領域とコラージュの自然風景の貼付について検討し，活力が低下している被験者は，リラックスさせる機能を持つ自然風景を多く用いることで，休息の欲求を充足させようとしていると考察している。自然風景は，動的なエネルギーが投影されやすい乗り物と比べると，静的なイメージを象徴しやすく，困難に対する動的な対処を行う対決型との親和性が低いため，負の相関が見られたことが推測される。よって，ストレス・コーピングという視点から見た際に，自然風景と乗り物は対照的な象徴的意味を持つ素材であることが考えられる。

コラージュ作品の貼付内容と対人ストレスの関連について，素材の中でも特に人間との関連を考えたが，結果はその予想を支持しなかった。コラージュの貼付内容については，被験者の対人ストレスが単純に内容に反映されるものではないことが考えられる。予想とは異なるが，有意傾向な相関がみられたものとして，対人ストレスの頻度と乗り物，対人ストレスの程度と人間部分，対人劣等と動物があった。これらについては，今後データを増やしてさらに検討を重ねる必要がある。

まとめと今後の課題

本研究では，コラージュ作品を通して制作者を理解するための指標を見出すことを目的として，貼付箇所や貼付内容とストレス・コーピング，対人ストレスとの関連を検討した。その結果，貼付

箇所にはストレス・コーピング，対人ストレスともに関連が見られなかった。ストレス・コーピングと右領域の関連について，佐野（2001）の知見と異なる結果を示したことから，その知見は確定的なものでなく，さらなる検討が必要である。また，対人ストレスに関しては，同じ対人ストレスでもそれによる内的体験はさまざまであることから，コラージュ作品の右側領域への貼付の多さを空間象徴仮説で説明することは難しいことが推測された。一方，貼付内容については，乗り物はストレス・コーピングにおける困難への前向きさや積極性といった動的なエネルギーとの関連が見られた。しかし，対人ストレスと貼付内容については，いくつか相関が見られたものの，いずれも有意傾向であるため検討を重ねていく必要がある。

本研究では以上のことを示したが，本研究の結果はコラージュ作品を通した制作者理解のための客観的指標とするにはまだ十分ではない。サンプル数や分割方法，空間象徴仮説の捉え方について今後も検討を重ねる必要がある。特に空間象徴仮説は多義的であるため，その中の一つの意味だけに着目し，コラージュの貼付箇所と単純に関連づけることには慎重でなければならない。

引用文献

秋山さと子（1982）．ユング心理学へのいざない―内なる世界への旅―　サイエンス社

青木智子（2011）．コラージュ技法・療法の現状と課題―2000 年以降の研究動向―　カウンセリング研究，**44**，167-178.

橋本剛志（1997）．大学生における対人ストレスイベント分類の試み　社会心理学研究，**13**，64-75.

日本健康心理学研究所（2011）．ラザルス式ストレス・コーピング・インベントリー[SCI]Lazarus Type Stress Coping Inventory　実務教育出版

松下姫歌（2007）．箱庭療法におけるイメージとリアリティのポテンシャル　皆藤　章・田中康裕・岡田康信（編）　箱庭療法の事例と展開　京大心理臨床シリーズ 4　創元社　pp.342-363.

佐野友泰（2001）．コラージュ作品に表現されるストレスコーピング・スタイル　日本芸術療法学会誌，**34**，33-38.

佐野友泰（2002）．コラージュ作品の解釈仮説に関する基礎的研究―コラージュ作品の客観的指標と YG 性格検査，MMPI との関連―　神奈川県精神医学会誌，**51**，19-24.

丸山愛子・白川佳子（2006）．社会に適応すること 山崎 晃・浜崎隆司（編）　新・はじめて学ぶこころの世界　北大路書房　pp.202-220.

田中亜子・佐野友泰（2002）．コラージュ作品の特性とメンタルヘルス指標の関連（Ⅱ）　日本教育心理学会総会発表論文集，**44**，449.